



2013年9月11日発行 第20号
 事務局長 小島 彬
 TEL/FAX 077-589-3724
 akrkojima@ybb.ne.jp

2012年度 子どもの未来をひらく教育のつどい

〈生きる力と学び～教育課程・生活科・総合学習・大学教育〉分科会報告

去る1月26日(土)、子どもの未来をひらく教育のつどい(滋賀教研集会)が開催されました。「生きる力と学び」の分科会では、毎年、生きる力とはどういうものか、主体的な学びと系統的な知識の獲得をめぐる興味深い論議が積み上げられています。

どのようにして主体的に生きる力を系統的に獲得できるようにするか

山上 修(滋賀民研)
 田中成幸(八日市高校)

今回の参加者は、小学校から2人、高校3人、大学2人、一般1人と高校生3人の計11人。討論の柱は、子どもたちが「必要としている生きる力」、「学びの喜び」とは、どのようなものか。小・中・高・大の各レポートの交流、議論を通してそれぞれの課題を明らかにしていく。

まず以下の問題提起を行った。

1) OECDのDeSeCo(2008年)を念頭にして論議したい。2) 系統的な知識重視の授業が多いが、すぐ剥落する。一方、「総合学習」は、子どもの自主性とつながりを育み、興味・関心、好奇心を刺激し、自ら課題を発見し、追究する力を育むが、系統性がない。「総合学習」に系統性を導入すること。これが今後の課題だ。

レポート報告は以下の通り。

- 1) 実践報告1 「玉川高校の総合学習」～個々の進路実現を目標に総合的な学びを行う～
- 2) 実践報告2 八日市南高2年生3人と教員による「東北ボランティア第1次隊報告」(報告とVTR上映)
- 3) 実践報告3 小学6年生総合学習「フクシマとヒロシマ～この子たちと考えるこの国の未来」
- 4) 実践報告4 「大学生の学びを考える3～遊び・つながり・理解し合い・聴き・話す」

討論の内容と今回の到達点は次の通りである。

高校生の「総合学習」を本来の内容に変えて5年間持続しているのは、①内容が生徒や教師にも好評、系統性も追求。②担当課と学年の連携。今後の課題は感想文だけの段階からどう発展させるか等。

東北ボランティアに参加した高校生による先駆的な実践。参加高校生の得難い感動をVTRで全校生にひろげ共有。現地との交流の持続が課題。どう総括し今後につなぐか。

小6の総合学習は、3.11以後、新聞切り抜き等で関心・興味を育み、修学旅行と結び、討論会で子どもの主体的な力を発揮させ、批判する力も身につけさせるなど生きる力を育んだ貴重な実践。

大学では、孤立し交流が困難な学生を、ゲーム等をとりにれた授業、学生自身に演習を企画させ、心を開き、自己を知り、思いを出させ、人間同士の交流の素晴らしさを体験させ、授業の中で自己と社会とのつながりを構築していく実践。

以上を通して、生きる力をどう育てるか。3つ課題を提起したい。今求められる「生きる力」とは、DeSeCoを参考に表現すると、<人生の成功と良好な社会(正常に機能する持続可能な社会)を形成するため、a) 主体性(自己の考え方・感性)を育て、人生の目標を立て実現する力、b) 人間関係を民主的に築く力、c) そのために道具を使いこなす力>といえる。



1. a) 主体形成力と c) 道具活用力の側面から、「生きる力」をどう育てるか

まず社会に①興味・関心を持たせる→小学校では、新聞切り抜き・同世代の投書を読み自らも書き関心をもたせ、高校では、西谷講演や映画「恋するトマト」でアフガンや農業への関心を、東北ボランティアの実践では、現地に行くことで自らの問題とする。次に②何が問題・課題なのかを考えさせる。小学校では、「原発の今後について」どうあるべきか等について考え、③その問題・課題の解決を追求する。④その過程で必要な知識<道具>をとりいれ、課題解決に役立てていく。

小学校では討論会の開催とそのための情報・知識の獲得。この過程で求められる①②③④の力が「生きる力」ではないか。つまり①興味関心を持ち、②問題・課題を発見し、③問題・課題の解決めざす、④そのために必要な知識をとりいれる。人生を生きるとは、この(①→②→③→④)の繰り返しである。この力を鍛えることが「生きる力」となる。そのためには、この順序(①→②→③→④)をたどることが重要である。なぜなら知識<道具>は、実際に必要とされる場面で獲得してこそ自己の知的体系の適切な箇所に位置づく。位置づけば、同様の場面に出会ったとき、応用が利き、

生きる力となり得る。

これに対し、従来からの知識の獲得方法は、まず基礎知識が大切だから覚えなさい、やがて応用力、生きる力として必要になるから、としてきた。このように①基礎知識→②応用力→③生きる力という順序で追求されてきた知識は、興味・関心をもたせないまま、ただ基礎で大切だから覚えておきなさいと、実際に必要とされる箇所に位置づかないで収納されると、応用力や生きる力とならない。応用の段階でおもしろくなるよと言っても、面白さを実感しないままでは、基礎の段階で嫌になる。だから勉強嫌いが増え、試験が終われば剥落する。この①基礎知識→②応用力→③生きる力という段階論がいまだに支配的である。たとえば、高1・高2の数学は基礎だからおもしろくないが高3でこれらを使って解いていくとおもしろくなるから、それまで我慢させて基礎をたたき込む必要がある、とか、原発の討論会をやるためには基礎知識がないと深まらないだろうから、どうしたら基礎知識を獲得できるかといった考えが主流となっている。

今後は、基礎学習においても、事前に興味・関心をいかに引き起こすかが、ポイントになる。

今後の課題として、教科学習でも、主体的な学びの1方法として、①興味関心、②問題・課題の発見、③問題・課題の解決、④そのために必要な知識の獲得という順序と方法を追求し、検証すること。その際、「総合学習」の方法を生かすことが有効である。

2. a) 主体形成と b) 人間関係の民主的形成の視点から「生きる力」をどう育てるか

自己が見えず、他人とつながれない個人が異質な集団との交流を通して変革していく力を、授業における他人とのつながりの中で育てていく大学での実践から何を学びどう生かすか。この点が今後の課題である。

3. 長期的な課題として、総合学習の系統性をさらにどう充実させるか

支部総会開かれる



去る5月18日に大津で支部総会が開かれました。既に各分会の世話人からお手元に総会決定が届けられていることですが、支部財政を健全化するために会費を月50円値上げして850円、1年分を10,200円とすることが決定されました。なお既に多くの会員から払込をいただいています。

また規約の一部改正が原案通りどおり承認されました。(支部「総会」を支部「大会」とするのは、あらかじめ大会議案に正式な提案がされる必要があるという意見が出されました。従いまして引続き支部「総会」と呼ぶことにします。)(事務局長・小島 彬)

「原水爆禁止 2013 年

世界大会・科学者集会」に参加して

今年の原水爆禁止世界大会・科学者集会は“核兵器の廃絶！原発の廃止！逆流をこえて、さらに大きなうねりを”をテーマに、8月1日(木)、明治大学(東京)で、121名の参加者をえて開催された。長田好弘実行委員長の開会挨拶の後、6つの報告があった。いずれも内容豊かな報告であったが、私には山田朗氏(明治大学)の「日本はすでに、①世界有数の軍事大国、②兵器製造能力は輸出段階、③日本が軍拡すれば世界中に軍拡の連鎖、④“国防軍”ができれば、軍法会議・憲兵の設置は必至」という報告と今野宏氏(神奈川支部)のレジメにあった「原子力空母GWの原子炉は、①出力の点では2基で福島原発1基に相当、②濃縮率95%以上の燃料棒を使用、③炉心の分解点検はできず、燃料交換も艦の寿命約50年の中間点で一回、④多量の放射性物質の内包」の記事が印象に残った。

今年の集会は、科学者の報告が少なく、物足りない感じもしたが、一昨年(2011年)の岐阜集会で提起され、昨年(2012年)の大津集会でも継承した、「核兵器の廃絶と原発の廃止は同じ課題」という問題意識がしっかり定着したことを確認できた集会であった。(支部幹事・中村征夫)

「憲法問題講演学習会」に参加して

去る5月18日の支部総会終了後、滋賀第一法律事務所の弁護士・玉木昌美さんを講師にお招きし、「憲法問題」に関する講演学習会を開催しました。最初に、法律は国会が決めるものであるのに対し、憲法は政治権力を縛るもので、国において権力を行使する人に憲法を守れ、と国民が言っているものであり、時の権力が簡単に改正できないよう、国民が主体であるように書かれていることが確認されました。これが第99条で、憲法の前文、第9条、第12条、第13条、第25条、第81条、第96-98条などを読み合わせたあと、特に憲法と安保条約で問題となる第9条2項の重要性が強調され、集団的自衛権に関する説明がありました。

他にも、「領土問題—尖閣問題を中心に」、「憲法第96条の発議要件緩和問題」、「自民党の日本国憲法改正草案を斬る」、「戦争体験・被曝体験を次世代に伝えていく重要性」など、幅広いお話しをしていただきました。国民的議論をどうやって作っていくか、マスコミはあてにならない中、学習会などを通じて、小規模でも「わかった」、という人を作っていく、それらの人が次々とつながる、民主主義とはそういうこと、というお話しに、一般も含めて17人が耳を傾けた講演学習会でした。(滋賀県立大学・柳沢淳一)